

子供と自然をつなぐ地域プラットフォーム形成支援事業

① 地域の自然環境や教育資源を活用した事業

北海道地域プラットフォーム形成事業(根釧地区)

北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸

【事業のポイント】

- 当施設が道東地区におけるプラットフォームとしての役割を担う。
- 家族が楽しく、安全にキャンプができるよう職員が指導・助言にあたり、家族キャンプの自立を支援する。
- テント設営や野外炊事等、野外活動を通して家族の時間をもち、親子の絆を深める。



親子で初めての野外炊

1. 企画

(1) 事業実施の背景

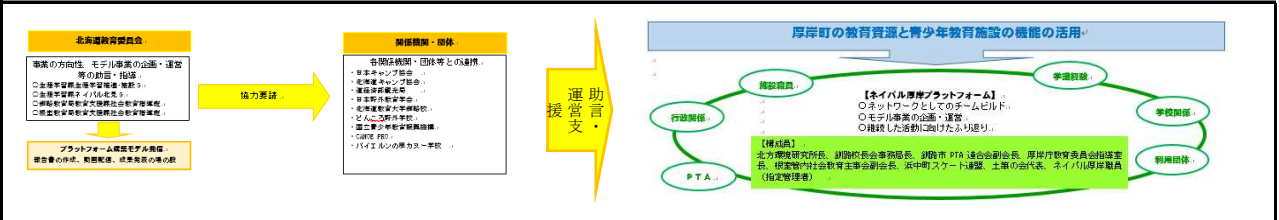
北海道では、都市化や核家族化、少子化等に伴い、子供たちの生活において、自然や社会、人々と関わる機会が減少し、自然の営みに対する感動や困難に直面した際の葛藤の経験が少なくなり、主体的に課題の解決を模索し、実践する実体験が少ないまま成長することによって、子供たちの精神的な自立の遅れや、社会性の不足、いじめ、暴力行為、引きこもりなどの様々な問題が生じているとの指摘がなされている。こうした中、子供たちに自然体験活動や社会奉仕活動など、様々な体験を積み重ねる機会を充実していくことは、規範意識や他人を思いやる心を育むとともに、自ら考え行動する力を身に付けさせるなど、社会の構成員としての豊かな人間性を育成する上で大きな意義があり、地域全体が子供たちの体験活動を支える環境を構築することの必要性も指摘されている。

(2) ねらい

本事業では、様々な関係者との協働による地域の特性に応じた企画づくりの場と地域の教育資源を活用した体験活動のモデル事業の実施とあわせて、「地域プラットフォーム」が発揮すべき役割や機能をさらに明確化・具体化するとともに、組織づくりや運営、体験プログラムのノウハウなどの成果を発信し、道内の各市町村において、地域住民が積極的に参画した青少年の体験活動が展開されていくことを目的とする。

2. 実施概要

(1) 地域プラットフォームの構成



(2) 具体的な取組の概要



はじめてのテント設営は、家族が設置場所を考えながら、ボランティアと一緒に協力して行った。



「森のお弁当箱」では自然散策をしながら材料を集め、家族ごとのお弁当を作成し、内容を説明した。



野外炊事では、火おこしをした後作業を分担してパエリアとポトフを調理した。具材には厚岸産の牡



選択プログラムでは、自然散策、原始火おこし体験等を行った。家族は初めての体験に楽しんでい

(3)実績スケジュール

月 日	内 容
7月25日(月)	第1回 北海道プラットフォーム形成事業根釧地区モデル事業実行委員
8月10日(木)～11日(金)	第2回 北海道プラットフォーム形成事業根釧地区モデル事業の運営
9月5日(火)	第3回 北海道プラットフォーム形成事業根釧地区モデル事業実行委員会

3. 成果と課題

(1) 成果

<参加者の声>

- ・ボランティアが積極的に子供とかかわってくれたおかげで、子供にとって楽しい体験となりました。
- ・自分たちだけでは、なかなかキャンプに行くことができないので、貴重な体験となりました。
- ・また、ネイパル厚岸のキャンプ場を利用したいと思いました。

(2) 課題

- ・予定していた人数より参加者の数が少なかった。
- ・主催者側のやり方に固執してしまうところがあり、より参加者目線で事業を行う必要がある。
- ・ボランティアが参加者の子どもと多くかかわりを持っていたため、保護者から喜ばれる場面があったが、事業のポイントの「家族での時間を持ち、絆を深める」という部分では、課題が残った。

4. 地域プラットフォームの展望(今後の方向性・取組等)

- ・実行委員は、事業の継続性を考慮するため、なるべく前年度と同じ委員に依頼する。
- ・参加者の要望に応えるため、今年度取り組んだプログラムの課題についてアンケートをもとに捻出し次の活動に反映する。
- ・ボランティア養成事業を行い、新たなボランティアの確保、ボランティアのスキルアップを図る。
- ・ファミリーキャンプを実施する場合、家族に対して募集し家族単位で活動するプログラムにする。
- ・ファミリーキャンプでは、参加者数を確保するため、夏期休業日の1ヶ月前には広報を始めるとともに、実施日を土曜祝日に設定する。

5. 団体プロフィール

ネイパル厚岸は、トドマツが群生する厚岸道立自然公園の中にあ
り、近くには雄大な海岸線を眺望できる愛冠岬がある。見下ろす太
平洋には大黒島と小島が浮かび、厚岸湖に注ぐ別寒辺牛川の周
辺は、国内3番目の広さを誇る泥炭湿原(ラムサール条約登録湿
地)となっている。

愛称『ネイパル厚岸』

『ネイパル厚岸』は、『自然=natureネイチャー』と『仲間=palパル』
を合わせた造語『ネイパル』に、所在地「厚岸町=厚岸」を合わせ
た造語。



子供と自然をつなぐ地域プラットフォーム形成支援事業 (③ 学校・地域を避難所と想定した防災キャンプ)

防災キャンプ(メインキャンプ・出前キャンプ)

北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見

【事業のポイント】

- 近年、北海道において、大規模な自然災害が発生しており、子どもたちが、災害に対する適切な対応とそのような環境の中で規範意識や他人を思いやる心を育み、主体的に行動する力を身につけるなどの豊かな人間性を育成する。
- 子どもたちが、社会奉仕活動などの体験を積み重ねる機会を充実させるため、様々な関係者との協働による実際の災害を想定した防災キャンプを行うことで、体験活動モデル事業の構築と学校や地域を拠点としたプラットフォームを形成する。



1. 企画

(1) 事業実施の背景

北海道は、都市化や核家族化、少子化等に伴い、子どもたちが自然や社会、人々に関わることが減少し、自然の営みに対する感動体験や困難に直面したときの葛藤の経験に乏しく、主体的に課題の解決を模索し実践するなどの実体験が少なくなっている。このような状況を踏まえ、道東エリアにおいては、平成25年の暴風雪による雪害や、平成28年度の台風による水害などの大きな災害に見舞われていることから、防災キャンプを通じて災害に対する備えや危険から、自らを守る力の育成を図るとともに、地域住民の協働による学校・地域を避難所と想定した防災に関するモデル事業を構築する必要がある。

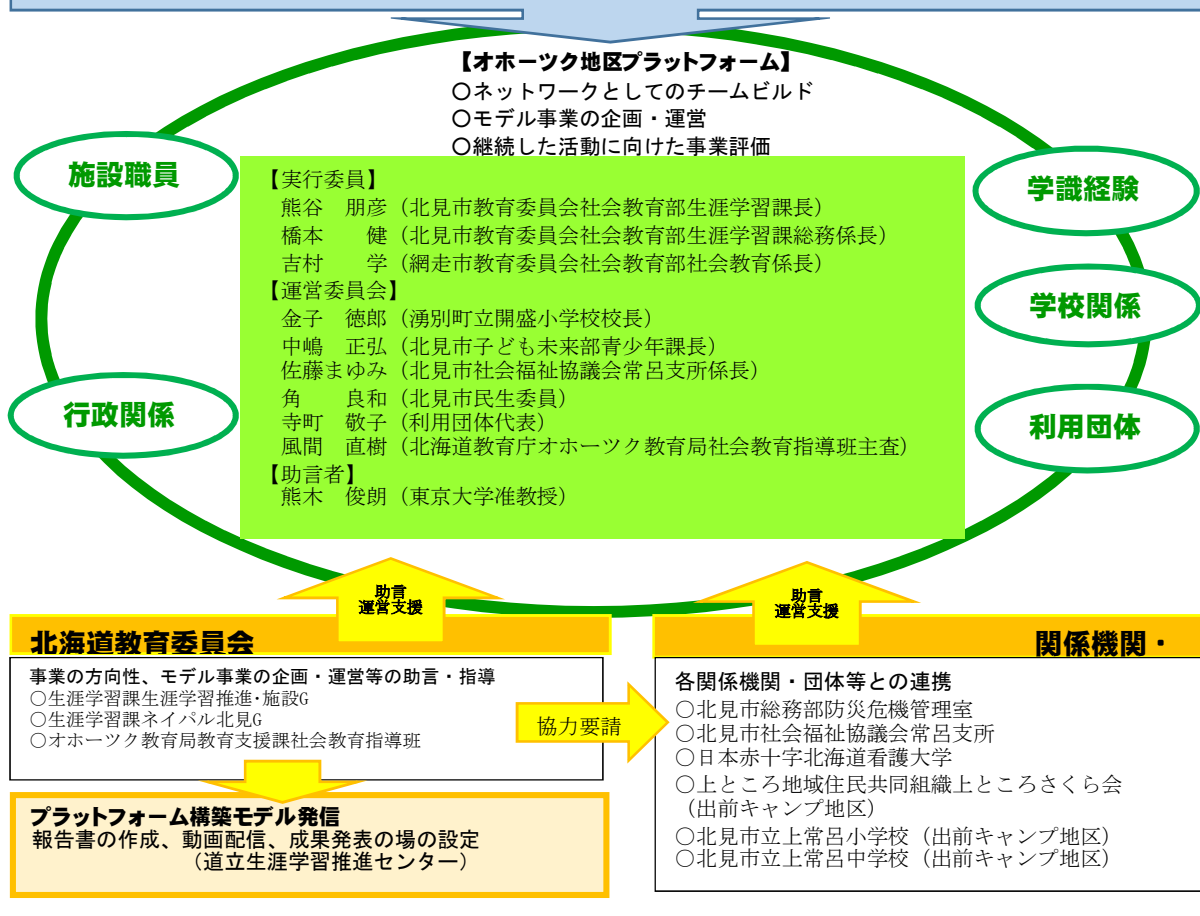
(2) ねらい

地域にある学校や社会教育施設などを避難所とし、そこでの生活を想定した体験活動などを通して、災害への対応力や防災意識、災害後の生活や自ら支援者として行動しようとする意識を高めるとともに、地域で活用できる防災体験アクティビティを開発し、道内各地へ普及するとともに、防災教育や防災活動の充実を図る。

2. 実施概要

(1) 地域プラットフォームの構成

北見市（常呂町）の教育資源と青少年教育施設の機能の活用



(2) 具体的な取組の概要

【実行委員会】

第1回

- 「オホーツク地区プラットホーム」事業概要、スケジュール等の説明
- 「防災キャンプ メイン・出前キャンプ」のプログラム(案)及び、講師(案)の提示と検討
- 参加者募集方法の検討

第2回

- 「防災キャンプ メインキャンプ」に係る成果・課題の検討
- 「防災キャンプ 出前キャンプ」のプログラム(案)及び、講師(案)の提示と検討
- 参加者募集方法の検討

第3回

- 「防災キャンプ メイン・出前キャンプ」の事業報告書の検討
- 「オホーツク地区プラットホーム」事業の次年度以降の方向性について検討

【防災キャンプ メインキャンプ】

- 地形観察 北見市常呂支所裏河川敷、ライトコロ川、栄浦地区多目的研修センターなどを視察
- 災害学習①
講 義 「水害や避難所生活等の実態について」 講 師 どんころ野外学校 新野 和也 氏
- 災害学習②
救助体験 応急処置、心肺蘇生、AEDの活用、けが人の搬出など 講 師 どんころ野外学校 新野 和也 氏
煙霧体験 講 師 北見市消防署常呂支所職員
- 避難所開設 講義、避難所設営、ダンボールベット設置など 講 師 北見市総務部危機管理担当部長 阿部 孝夫 氏
- 炊き出し体験 ハイゼックス袋を活用した炊き出し 協力者 北見市社会福祉協議会常呂支所職員
- 暗闇体験 ネイバル北見職員

【防災キャンプ 出前キャンプ】

- 災害学習・体験 講 師 どんころ野外学校 新野 和也 氏
講 義 「水害や避難所生活等の実態について」
- 救助体験 緊急時の対応、「SAMPLE問診(傷病者の情報)」「バイタルサイン(脈拍等のチェック)」「外傷の処置」など
- 避難所生活体験(演習「避難所設営のワークショップ」) 講 師 日本赤十字北海道看護大学教授 根本 昌宏 氏
講 義 「避難所とはどのような場所なのか…、また、避難場生活の困難とは…」
- 避難所開設 避難所の設営、ダンボールベット設置、片マヒ体験など
- 炊き出し体験 ハイゼックス袋を活用した炊き出し
- 気づきのリスト化 日常生活との違いや各種体験から気づいたことなどを整理
- 暗闇体験 ネイバル北見職員
- 全体まとめ ネイバル北見職員

(3) 実績スケジュール

月 日	内 容
4月19日	北見市教育委員会との打合せ(事業日程の調整と運営体制について協議)
5月19日	第1回施設運営協力委員会(オホーツク地区プラットホーム実行委員の選出に係る依頼)
6月19日	防災関係機関への事業説明(北見市総務部防災危機管理室)
7月29日	第1回オホーツク地区プラットホーム実行委員会
9月2日～3日	防災キャンプ メインキャンプ ※ 事業終了後、第2回オホーツク地区プラットホーム実行委員会を実施
9月26日	第2回施設運営委員会(メインキャンプ報告、出前キャンプ協力要請)
10月10日	出前キャンプ開催地区(上常呂地区)関係者会議(事業実施の最終確認)
10月14日～15日	防災キャンプ 出前キャンプ
12月12日or13日	第3回オホーツク地区プラットホーム実行委員会(予定)

3. 成果と課題

(1) 成果

地域の教育資源と青少年教育施設の機能の活用をテーマに、地域住民や関係機関・団体等との連携やモデル事業の企画・運営、継続した活動をねらいとして取り組んだ成果と課題を次のとおり整理した。

※ 継続した活動については、「4 地域プラットホームの展望(今後の方向性・取組)」で述べることとする。

【地域住民や関係機関・団体との連携の視点】

■ 地域住民や関係機関・団体の防災キャンプ(訓練・体験)に関する考え方や思いと、行政側の事業実施の意図や考え方を協議することで、参加する側となる地域住民や関係機関・団体の防災キャンプ(訓練・体験)に対する意識や実際の行動が、「やってもらう」から「自分から進んで」という意識の変化が見られ、取組や活動に主体性が見られるようになった。

■ 地域住民や関係機関・団体の方を事業の協力者とすることで、元来取り組んできたことと、今現在の取組の違いを知る機会となり、災害時における取組や行動に対する固定観念を払拭し、防災対策に関するイメージ化を図ることができた。

【モデル事業の企画・運営の視点】

■ 今回の防災キャンプ(訓練・体験)において、招聘した講師は、救助活動や実際に防災について研究をしている専門的知見を有している方に携わっていただいたことから、各プログラムを体験することで子どもから大人まで、高い知識を得ることができた。

■ 救助体験を担当していただいた講師が、実際に自分が住む地域で水害に遭い、災害ボランティアとして活動した経験もあることから講義についても担当していただき、参加者からは「直接体験された方の生の声が聞けたことで災害時の大変さが大いに伝わった」という感想があった。また、動画や画像を駆使しながら説明していただいたことで、子どもたちも災害時の大変さのイメージ化を図ることができた。

■ 「ふりかえり」を全体のまとめとして行い、それぞれのプログラムでの学びを振り返るとともに、減災や避難所のストレス軽減に向けて、避難者となった自分が何ができるかをグループで整理し、各自行動宣言したことで「他人ごと」ではなく「自分ごと」として、災害時における活動を意識付けすることができた。

(2) 課題

【地域住民や関係機関・団体との連携の視点】

- 今回の防災キャンプ(訓練・体験)では、地域住民として、地域住民共同組織(町内会)と関係機関・団体として、社会福祉協議会に参加してもらったが、地域にはその他、PTAや青年団等の団体などもあることから、どのように地域の人材を巻き込むかを検討する必要がある。
- 実際の災害時には、地域リーダーや地域住民の役割分担等、組織化を図ることが必要となることから、地域リーダーの育成や組織化に向けての意識づけ(イメージ化)を図る必要がある。

【モデル事業の企画・運営の視点】

- 訓練的要素が強いのか、体験的要素が強いのかをはっきりさせた、プログラムを企画する必要がある。
例えば、今回の防災キャンプであれば、「地形観察」にハザードマップを活用して避難経路を確認しながら避難所まで避難し救命講習を受講するなど一連の流れで訓練的要素を取り入れたプログラムにするとか、「避難所生活体験」として、避難者の受入に傷病者等の救助体験、避難所開設、炊きだし体験などを一連の流れにした体験的要素を取り入れたプログラムにするなど、訓練なのか、体験なのか、メリハリをつけたプログラムを企画する必要がある。
- プログラムの運営についてだが、各プログラムとも運営者や講師の指示により動くことが多かったが、「避難所生活体験」においてはグループワークとしての機能を生かし、各グループで主体的に行動させることができたとよかった。
- 防災キャンプ(訓練・体験)の事前と事後に「どのように避難所で過ごしたらよいか、どう行動すべきか」を計画させ、事前と事後の考え方を比較しながら「ふりかえり」をすると自発的な活動への意識付けとして効果的であった。

4. 地域プラットフォームの展望(今後の方向性・取組等)

平成25年度に暴風雪、平成28年度に台風による水害など、災害による直接的な経験のある地域であることから防災意識が高く、オホーツク管内においては、自治体や教育関係機関、NPO等団体が主催し防災教室などが各地域で行われている。

- 今回の防災キャンプ(訓練・体験)では、水害を想定したプログラムを展開したが、プログラム内容においては、災害の種類を問わず扱えるものとなっている。想定される環境(震災・水害・雪害など)に近い状況で実施することが望ましいのであれば、実施時期等の検討が必要となるが、関係機関・団体との連携の下、モデル事業として普及啓発していく。
- プログラム内容において、何に焦点化したプログラムとするかが重要であると考えている。避難なのか、避難所生活なのか、救助なのか、また、訓練要素の強いプログラム、体験重視のプログラムとして実施するのかなど、実施主体の要望に即したプログラム提供や事業実施における支援をしていく。
- 防災意識を更に高めるため、実施する地域や関係機関・団体等の支援においては、参加者(地域住民等)が、受身ではなく主体となって活動できるよう、意識の変化や高揚を促すプログラムが展開できるよう支援していく。

5. 団体プロフィール

北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見

所在地：北海道北見市常呂町栄浦365-1

ネイパル北見は、網走国定公園内のサロマ湖(面積は北海道最大)東岸に位置する誰もが利用できる道立青少年教育施設です。

湖に沈む荘厳な落日や、日本最大の海岸草原とされる北海道遺産ワッカ原生花園に咲き乱れる300種以上の草花、世界最大とも言われる古代遺跡群、冬には水面が真っ白な流氷で覆われるオホーツク海がすぐ近くにあり、広大な自然や深い歴史に恵まれた環境の中で、様々な体験を楽しむことができます。

